

## 賛助会員訪問記

日亜化学工業株式会社 本社工場 訪問記

ホームページ : [http://www.nichia.co.jp/jp/about\\_nichia/index.html](http://www.nichia.co.jp/jp/about_nichia/index.html)

2017年6月14日13時30分～15時20分 日亜化学工業株式会社本社工場（徳島県阿南市）を新妻清純総務理事、押木満雅事務局長、杉村比登美事務局職員の3名で訪問した。JR阿南駅（徳島よりJR牟岐線で南へ約40分）よりタクシーで土佐東街道に沿って北西方向に20分ほど走り、稲田に挟まれたのどかな街並みの奥から忽然と近代的な建屋が現れ、しばらくして本社工場に到着した。工場入口に近い建屋で、第一部門生産本部開発部 富本高弘課長、管理本部総務部 湯浅泰三係長、第一部門生産本部開発部 吉田理恵 研究員および吉田理恵子研究員に應對して頂いた。

先ず、湯浅氏よりプロジェクトを用いて会社概要を創業より今日までを4期に区切って説明して頂いた。第1期1956年～1965年：創業は1956年（昭和31年）12月、前会長の小川信雄氏が高純度塩化カルシウムの製造、販売を阿南で始めた。同氏は薬学出身で、第2次大戦の際に薬剤将校として南方諸島に赴任、物資の無い中で傷病兵治療のための薬剤を現地自活し、またフィリピンでは蛍光灯の明るさを知った。復員後、結核の特効薬であるストレプトマイシンの原料の一つである塩化カルシウムの製造、精製を良質な石灰石の取れる阿南の地で開始した。第2期1966年～1972年：高純度薬品精製技術を応用して蛍光体の開発、製造を行い、カラーテレビ用蛍光体の製品化にも成功、蛍光体で国内トップ企業となった。第3期1973年～1992年：照明用、ブラウン管用各種蛍光体などを主力として、1985年に世界第3位の蛍光体メーカーとなる。この頃から、大手メーカーとの交流を通して、従前から注目していた光半導体に関する技術を蓄積、光半導体研究用の建物や設備などへの先行投資を積極的に進めた。第4期1993年～現在：1993年に青色LEDの開発に成功。1996年には青色LEDに黄色蛍光体を被せるという蛍光体メーカーならではの手法で白色LEDの開発に成功。これらの成果により蛍光体に続き、LEDが収益の柱となった。また、同社得意技術の一つである粉体製造、精製技術を応用したりチウムイオン電池正極材料の製造も開始、モバイル機器に用いる二次電池の需要急増などにより主力事業のひとつに成長、今後は自動車向けをはじめ、更なる販売規模拡大に期待しているなどの話があった。その後、引き続き企業説明の動画を拝見した。社名日亜化学の由来は、日本からAsia、America、Australiaへと言う意味で名付けたとの事であり、今日ではその名前の通り、事業は日本から世界へと大きく発展している。「高品質な製品を高効率に生産、徹底した品質管理」実現のために分析技術の充実を図っており、分析機器など必要なものにはキッチリと先行投資している。同社は研究開発や製造拠点がコンパクトに徳島県阿南市周辺に集約されており、顧客の要望に素早く対応出来る良さがある。また、「環境保全を最優先とし地域と一体化した成長を目指す」などの創業者の経営姿勢が確実に反映、踏襲されており、同社ならではの社風を醸し出しているのではないかと感じた。

次に、吉田理恵、吉田理恵子両氏より、磁性材料開発について説明して頂いた。磁性材料開発は機能粉末開発の一環として第一部門生産本部開発部久米道也主幹研究員（今回訪問の窓口をしていただいた）により1990年から始められた。同社では「化学者が作る磁石」という観点からコロイド化学を駆使したSmFeN微粉末形成技術を開発。今までの高純度薬品精製技術などを駆使した粒径制御により、直径3 $\mu$ mの球形でサイズの揃った粉

## 賛助会員訪問記

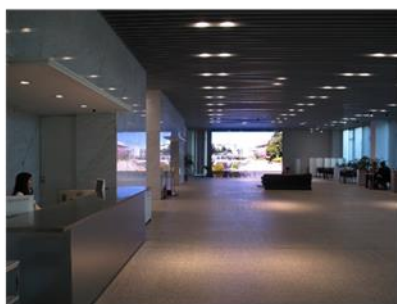
未形成が可能となった。更に酸化防止技術を加え、磁気特性的には J-H ループ角型の良さや耐熱性など競合製品との差別化を図る事が出来た。この磁性粉末を用いたボンド磁石を開発、製造、販売している。今後、磁石への要求性能が増々厳しくなっていく中、お客様の現場の声に寄り添いながら、利用場面の拡充を目指してボンド磁石の特性を生かしつつ、磁性材料の充填率向上や磁気特性と耐熱性などのトレードオフを抜け出せるよう特性向上への開発を進めていきたいと熱っぽく語られた。最後に展示室を見学した。化学品、二次電池材料、磁性材料や光半導体などの展示があった。中でも青色 LED と蛍光体の組み合わせにより色度図の全ての色彩を表現した展示が印象的であった。

創業者のモットーである「ひとつ、勉強しよう　ひとつ、よく考えて、よく働こう　ひとつ、そして世界一の商品を創ろう」には、目先の成果よりも、まずはよく学び、考え、手を動かすことで他の誰かとは異なった視点が生まれてくることを尊び、その小さな種がやがて大きく花開かせることを願って会社として大切に育てている印象を受けた。このような会社の雰囲気によるものなのか、若い皆さんの明るく希望に溢れた説明に、情熱を持って研究開発されている姿が目に見え、我々も楽しげな気持ちとなった。

同社の明るい未来が見えて来るような感触を持つと共に磁性材料が新たな収益の柱となる様に期待しつつ、入梅直前のすがすがしい晴れ間に、訪問の余韻に浸りながら帰途に就いた。



会議室で



エントランスホール  
(奥の壁面に 249 インチ LED ディスプレイ)



工場入口